

自分らしさを求めて

—ミュージカル『ウィキッド』と ファン・カルチャーを生み出す女性ファンたち—

井口裕紀子

I. はじめに

本研究は、ブロードウェイ・ミュージカル『ウィキッド』とその女性ファンたちがインターネット上で作り出しているファン・カルチャーに焦点を当て、そこで繰り広げられる自己表現や交流が女性ファンたちの自己形成とどのように関わっているかを考察する。ファンたちは、ウェブサイト、ブログ、その他のソーシャル・メディアにおいて、情報を交換し、評論や感想、アート・ワークや物語創作など、多様な活動をしている。ここで作られている「ファンだけに分かる意味の空間」の中で、ファンたちは、個々がおかれている状況や問題を乗り越え、それぞれが「自分らしい」と感じられる自我を追求している。ここで出現するファンのディスコースは、「ポスト・フェミニズム」社会といわれるアメリカを生きる若い女性たちが、ジェンダー規範を超えて生きるため、女性の問題を語る一種のフェミニスト・フォーラムのような役割を果たしていると考えられる。

この研究で用いる「参加型文化」という概念は、メディア研究者であるヘンリー・ジェンキンスが提唱したものであり、ファンを文化的テキストから新たなものを生み出すプロデューサーと捉え、支配的なメディアから生まれた素材を利用し、ファン同士が協働することで、自分たちの興味や喜びを促進しながら作り上げる文化を意味する¹。以下、ジェンキンスによる「参加型文化」の概念にならない、『ウィキッド』のファン・カルチャーの担い手である女性ファンたちを、創造性と主体性を持ったプロデューサーとして捉え、『ウィキッド』のファン・カルチャーの中で起きるこの現象について考察を行う。そして、『ウィキッド』のファンたちが作ったインターネット上のファン・コミュニティに私自身が参加し²、その中で行われるディスコースの分析をすることで、『ウィキッド』のファン・カルチャーは、フェミニズムやフェミニストという言葉は使われてはいないが、女性たちが自身の自立や自由を考え、語り合い、互いをエンパワーする場となっていることを明らかにする。

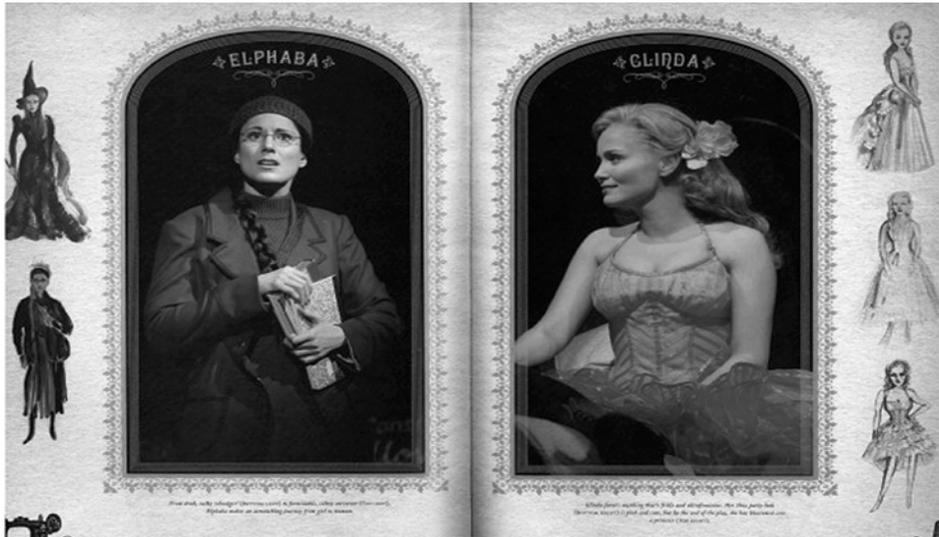
Ⅱ．ミュージカル『ウィキッド』

ブロードウェイ・ミュージカル『ウィキッド』は、2003年に初演を迎えてから今日にいたるまで、ニューヨークで上演され続けている大ヒットミュージカルである。この作品は、近年ブロードウェイで人気を博した他のミュージカル作品に比べ、女性ファンたちが圧倒的に多いことで知られている。たとえば、ボストングローブ紙は、『ウィキッド』の観劇者のうち約70%が女性であるとし³、またニューヨークタイムズ紙は、『ウィキッド』を観劇した18歳以下の観劇者が、他の作品よりも約2倍の数であると報じた⁴。

女性たちがこのミュージカルにひきつけられるのは、この作品の主人公である2人の魔女、エルファバとグリンドが対照的な女性像として描かれており、このヒロインたちがそれぞれの内なる葛藤を克服しながら、二人の間にある対立を超えて友情を育んでいく姿に感動を覚えるからだと考える。また、『ウィキッド』は、多くのアメリカ人にとって馴染み深い物語『オズの魔法使い』を基に作られたミュージカルであり、『オズの魔法使い』の悪役であった「西の悪い魔女」エルファバと主人公のドロシーをまもる女神のような存在であった「良い魔女」グリンドが、『オズの魔法使い』の時とは異なる性格で登場していることも観客の興味をひく要因であったと考えられる。

エルファバとグリンドは、映画『オズの魔法使』に登場する西の悪い魔女と良い魔女グリンドのイメージを引き継ぎ、対照的なイメージで表象されている（図1⁵）。たとえば、メディア研究者である須川亜紀子は、『オズの魔法使』における2人の魔女の表象について、白人で女性らしいグリンドを「家父長制的社会において女性の模範とされるモデル」である「良い女」として、奇妙な容姿を持つ西の悪い魔女を「社会規範やジェンダー規範を転覆する脅威として否定されるべきモデル」である「悪い女」とし、彼女たちを対立させることで、これを視聴する女性たちに家父長制の社会が理想とする女性となるよう教育を施す仕組みとなっていると論じた⁶。

(図1)



たしかに、『ウィキッド』においても、エルファバが異質な緑色の肌、真っ黒なローブととんがり帽子といった格好をしていることから「悪い女」のイメージが、そしてグリンドは白人でブロンド、飾り気のある鮮やかな衣装といった点で「良い女」のイメージが表象されている。しかし、彼女たちは、『オズの魔法使』の西の悪い魔女や良い魔女グリンドの性格とは大きく異なり、容姿によって「良い女」と「悪い女」の二元論へ組み込まれることを拒んでいる。

エルファバは、彼女の奇妙な容姿が原因で嫌われ者であるが、勇敢で正義感溢れる女性である。そして一方のグリンドは社交的で人気者ではあるが、依存的で自主性がない女性であり、他者からの評価を気にするあまり自分の意志に沿った行動ができない。2人は、出会った頃こそ互いが理解できず、嫌いあっていたが、自分とは違う魅力を持つ相手に感化され、影響し合いながら互いに成長していく。エルファバとグリンド、そして彼女たちの関係は、「良い女」と「悪い女」の二元性を超えた複雑で両義的なものであり、その事実が多くの女性ファンたちに多様な視点から自己のアイデンティティを投影することを可能にしているのである。

Ⅲ. 『ウィキッド』の参加型ファン・カルチャー

女性ファンたちは、単に『ウィキッド』のテキストを消費しているだけではない。多くのファンたちは、SNS（ソーシャル・ネットワーキング・サービス）で個人のアカウントやブログを開設し、ファンとしての活動を行っている。SNS

のひとつであるツイッターでは、劇評を掲載するファンもいれば、自分がどれだけ『ウィキッド』を愛しているかをつぶやくファンもいる。個人でホームページを運営しているファンは、『ウィキッド』に対するメディア記事や、出演者の情報を掲載する。出待ちでの体験談、出演者と一緒に撮った写真を掲載するものもいれば、タンブラーやインスタグラムで、自主制作のアートや二次小説を載せるものもいる。これらの多くのファンたちは、情報を発信すると共に、同じ興味を持つ他のファンと繋がり、『ウィキッド』に関するあらゆる情報や意見の交換を行うファン・コミュニティを作り出している。

『ウィキッド』のファンたちがつくるファン・コミュニティは、少人数で運営しているものもあれば、メンバーを約1000人以上も抱えるコミュニティもある⁷。ほとんどのファン・コミュニティでは、参加するために必要な条件や制限といったものは存在せず、『ウィキッド』への知識や観劇数といった実績よりもファン・コミュニティに参加したいという意志を尊重し、歓迎している。「ようこそ、ニュー・オジアン!」このセリフは、多くのコミュニティに共通して、新しい参加者に向けて発せられるものだ。「オジアン (Ozian)」とは、ミュージカルに登場するオズの国民を指す言葉である。ファンたちは、この言葉を『ウィキッド』のファン（オズの世界に生きるもの）という意味で使用することで他のファンに親近感や連帯性を持たせ、新しい住民を歓迎するとともに積極的な発言を促す体制をコミュニティ内に作り出している。

そして、ファン・コミュニティ内では、新たなファンを歓迎するだけでなく、観劇やファンとしての活動経験が豊富なメンバーたちが、自らの知識を用い、様々な疑問や悩み持つ初心者参加者たちを助けようとしている。たとえば、初めて『ウィキッド』のブロードウェイ公演を見に行くファンが、どの席を買うべきかという質問をコミュニティ内のフォーラムに書き込むと、観劇数の多いファンたちが自身の経験に基づいて、観劇するのにベストだと思う席を教えている⁸。その他にも、『ウィキッド』の出演者から Playbill⁹へサインをもらうため、出待ちしようかどうか悩んでいるファンがいたら、出待ちよりも運営会社に直接手紙を送った方が確実にサインをもらえると答えるものがあったり、手紙の宛先や返信までに要する時間といった詳しい情報まで書き込むものもいたりする¹⁰。

自身の経験から得た知識を用いて、経験者たちが初心者たちに指導を行う一方、『ウィキッド』に関する知識量の差は別として、ファンたちはお互いが持つ情報や意見を出し合い、議論を楽しんでいる。その際、時には対立することもあるが、ファンたちは議論を通して『ウィキッド』のより深い知識や解釈を得ようとしている。たとえば、あるファンは、ミュージカルの終盤にエルファバとグリーンダが、相手からの影響により自身が良い成長を遂げたこと、そして2人の友情

を歌うミュージカル・ナンバーについて、エルファバとグリンドは成長したとは思わないし、2人の友情は希薄だと述べている¹¹。この書き込みに対し、エルファバの成長が見られないことに賛同し、グリンドの成長はエルファバが大きな要因だと答えるファンもいたが、その一方で、容姿にコンプレックスを抱いていたエルファバはグリンドによって自信を持つことができ、グリンドはエルファバから正義感に従い行動する勇気を得たと反論するファンもいた¹²。これらの多様な意見に対し、議論に参加したファンの中には、今まで自分がそのように解釈しなかったと話し、すばらしい考察だと賞賛を送るものもいれば、理解ができないという態度を示すものもいた¹³。このように、ファンたちは作品に対するそれぞれの解釈や意見を出し、議論し、他者からの意見を取り入れることで、自分にとってより有意義な解釈や知識を生み出そうとしている。

多様な会話が行われるこのインターネット空間で特に興味深いことは、女性ファンたちが『ウィキッド』に関する会話を通して、フェミニストたちが元来から目指す女性の自立や自由について語る場を生み出していることだ。現代のアメリカは、1970年代から始まった第二波フェミニズムへのバックラッシュにより、多くの人がフェミニズムやフェミニストという言葉に否定的な態度を示す傾向にある。『ウィキッド』のファン・コミュニティでも、女性たちはフェミニズムやフェミニストといった言葉を使用していないが、ファンたちが集うフォーラムでは、「自分らしい自分」を発見することの大切さが繰り返し語られる。そしてこの「自分らしい自分」というのは、親や仲間、そして社会から課せられるジェンダー規範と、そこから生まれる葛藤を乗り越えて作り出すものだとされている。その観点からみると、『ウィキッド』のファン・カルチャーの一部は、女性たちが日常に抱える問題をかたりあうフェミニスト・フォーラムとなっており、この現象はファンたちによって作られた『ウィキッド』のファン・カルチャーの最も重要な部分だと考えている。

IV. 「自分らしさ」を求めて

『ウィキッド』のファン・カルチャーでは、「エルファバかグリンドどちらが好きか?」という質問に対し、女性ファンたちが自分とキャラクターの共通点を語ったり、自身が人生に抱く葛藤や願望を打ち明けたりする。たとえば、2005年に『ウィキッド』の成功を受けて出版された本 *Wicked the Grimmerie: A Behind-The-Scenes Look at the Hit Broadway Musical* の中には、パレスチナ系アメリカ人のファラ・アブザリアという少女のスピーチが掲載されており、彼女がイスラム教徒、アラブ系であるためにテロリストや移民といった偏見のなかで生きていること、そし

てその境遇とエルファバを結びつけたことを話している¹⁴。

私は、緑の肌によってクラスメートから避けられてしまう彼女（エルファバ）の苦しみを知っている。だって私も自分の意志でつけているスカーフが理由で、よそ者扱いされているのだから。…私は、舞台の上で自分の人生が描かれるなんて思いもしなかったし、演劇がこんなに私を感動させるとは知らなかった¹⁵。

アブザリアのように、エルファバの中に自分自身を見つけるファンの多くは、自身が「よそ者」もしくは「社会的弱者」であると語っている。たとえば、ある女性ファンは、「私は、エルファバとかなり似ているように思う。わたしがそうであるように、彼女は社会的弱者であるからだ。だれも彼女の味方にならないが、彼女は常により良いものを求めて奮闘する。彼女の生き方は、自分とそっくりだ。¹⁶」というような書き込みを残している。多くの女性ファンたちは、オズの国で孤立し、周縁へ追いやられ続けたエルファバに自分自身の社会的立場や状況を結びつけているが、彼女たちの中には、エルファバが持つ信念の強さや葛藤をはね除けようとする力に影響されているものも多い。

エルファバは、私が最も自分を投影しているキャラクターだ。私みたいにいじめられたことのある若い女の子たちはいつか（エルファバのように）「重力に逆らいたい」と願っている¹⁷。

『ウィキッド』は、本当に私の人生を変える出来事だった。このショーがきっかけで、私はミュージカルのファンになった。そして私は、『重力に逆らって¹⁸』という曲を聞いたときに、エルファバになろうと心に決めた¹⁹。

女性ファンたちの会話に現れる「重力に逆らう」という言葉は、『ウィキッド』の第1幕最後にエルファバが歌うミュージカル・ナンバー『重力に逆らって（“Defying Gravity”）』を指す。この曲は、支配者たちの陰謀により「悪い魔女」となったエルファバが、自分の意志に従って生きることへの決意を高らかに歌い上げ、社会的弱者として抑圧され続けた自分自身や迫害を受けているマイノリティたちの権利を守る政治活動家へと変化する重要なものである。『重力に逆らって』は、多くの女性ファンたちにとって応援歌となっており、「Gregory Maguire Discussion Board」というサイトでは、女性ファンたちが自分の人生における「重力」はなにか、そしてそれをどのようににはね除けるのかについて具体的な経験を語り合っている。

たとえばある女性は、両親が大学を卒業していないことから生まれるコンプレックスや、母親が過保護であるために自由ではないことが、彼女にとっての重力だと語っている。そして、そのような環境を乗り越えて大学に進学したことが、彼女にとって重力に逆らった経験だとし、それを自立への一歩として誇らしげに話している²⁰。またある者は、両親の離婚や父親との確執を打ち明け、自分が望む将来に対し、父親が支持を示さないことが重力だとしている。そして、父親とのわだかまりは解けていないが、その女性は自分の為に進むべき道への一歩を踏み出す決意を述べている²¹。

このように自分の両親や家庭の中で重力を感じると答えたものもいれば、職場における重力について語るものもある。その者は、同僚の男性からのいじめを重力と捉え、それをはね除けるために勇気をだして仕事を辞めたという。彼女は、仕事を辞めるか否かで非常に迷ったが、退職という自身の決断により自由を得たと話し、改めて学位を取ろうという決意を述べている²²。彼女の他にも、フランス語でAをとることや、プールの大会で良い記録を得ることが自分の重力に逆らった経験だと語るものもいれば、自分を愛せるようになることこそが自分にとって重力に逆らうことだと語るものもあり²³、女性たちが「重力」を感じる場所や、それへの逆らい方も個々によって実に様々だ。

女性たちは、エルファバに自分の人生を重ね、生きる中で感じる苦痛や願望を書き込むことで、人生を生きる中で傷つけられた自我意識を克服しようとしている。しかし、女性ファンたちはただ自身について語るだけではない。彼女たちは、自分と同じように重力に挑戦しようとする他のファンたちの書き込みを読み、応援の言葉をかけると共に、自らも他者の経験に影響されている。そして、フォーラムでの会話を通し、互いに力を与え合うことで、女性ファンたちは自由や自立を手に入れるためのフェミニスト・フォーラムを『ウィキッド』の参加型ファン・コミュニティの中に作り出しているのだ。

多くの女性がエルファバに自分自身を発見する中、グリンダに自身を投影している女性ファンたちは少ない。その理由は、グリンダが他者に依存しがちで、人々から愛をもらえなくなることに恐れを抱き、自分の意見を貫くことや自身の判断で正しい行動をすることができないからだと考える。そのため、彼女に共感を示すファンたちの多くは、人気者でおしゃれが好きなところが似ていると語る傾向にあるが、時にはこのような主張をするファンもいる。

グリンダは本当に中身がなく、浅はかな存在か？確かに彼女が最初に登場した時は、そのようなキャラクターであった。しかし、グリンダはもっとも大きな成長を遂げるキャラクターであり、ショーの中で私が一番共感するキャラク

ターだ。多くの女性にとってエルファバは重要な存在であるが、グリンドは、私にとって大切な存在だ²⁴。

この女性ファンが主張するように、グリンドは『ウィキッド』において、大きな成長を見せるキャラクターである。グリンドは、「悪い魔女」として社会から追われる身となったエルファバと対照的に、「良い魔女」として国民からまつり上げられるが、本来オズの国の政治を担う地位にいるはずの彼女は、支配者たちから蔑まれ、政治の場から遠ざけられる。グリンドは、自分の容貌に自身があっても、魔女としての才能や政治家としての力量に関しては自信がなく、支配者たちに言われるがままであった。また、友人であるエルファバが犯罪者に仕立て上げられたことに胸を痛めていても、彼女を庇うことで国民からの愛を失うことを恐れ、何も行動することができない。そんな時、エルファバは、自分を排除しようとする国家の前で、政治活動家として立ち行かなくなり、自身の存在をオズから消さざるを得なくなる。その際、エルファバは自分にとって唯一の友人であり、国民から愛されるグリンドであれば、社会の内側から改革を起こせると考え、自身が成せなかった社会変革の夢をグリンドに託すこととなる。これにより、グリンドはエルファバから彼女にも独自の魅力や可能性があることを教えられ、自分の信念に従って生きることの重要性を理解する。そして、彼女はオズの支配者たちを追い出し、オズの国の新たなリーダーへと変身する。

グリンドはエルファバに比べ、ファンからの人気は少ないが、彼女は現代のアメリカに生きる女性たちと同じような状況にいると私は考える。21世紀においても、度々「女らしさ」は大衆文化の中で表象され、女性たちは、未だに家父長制が作り出した伝統的価値観と結びつけられることが多い²⁵。その点で多くの女性ファンたちは、社会から「女らしさ」を求められ、自身を抑圧せざるを得ない状況にあり、他者が求める自分と「自分らしい自分」の間で揺れ動くグリンドと似ている。

また『ウィキッド』では、社会の底辺に位置する個人が社会的抑圧や国家に挑戦することへの困難も描いていることから、エルファバのように生きることへの難しさも伺える。なぜなら、エルファバは社会的弱者から政治活動家へと変化するものの、最終的にオズの国から存在を消されてしまうため、彼女は自分自身の力で社会変革の夢を叶えることができないからだ。しかし、たとえ夢やぶれてもエルファバが多くの女性ファンたちのロール・モデルとしてあり続けるのは、グリンドがエルファバの夢を引き継ぎ、国家のリーダーへと成長を遂げるからだと考えられる。多くの女性ファンたちは、グリンドの成長物語に自己変革の可能性とフェミニスト的自我を見つけるのではないだろうか。

V. おわりに

女性ファンたちが作る『ウィキッド』のファン・カルチャーは、フェミニズムやフェミニストといった言葉は使われていないが、彼女たちが日々抱く葛藤や願望を模索し、自我を構築するための非常に重要なフォーラムとなっている。ファンたちは、ミュージカルのストーリーやキャラクターを自分たちの日常と結びつけることで、テキストを自分にとって意味深いものにしていくが、時に彼女たちは、『ウィキッド』が提示するストーリーや設定の枠に捕われず、創造力を用いて、テキストを自分自身が満足できるものへと作り変えている。そのひとつの例として挙げられるものにファンたちが描くファン・アートがある。

コミュニティの中でよく見られるファン・アートの中には、物語が終わった後の世界を描いたものがある。ミュージカルでは、エルファバとグリンドの別離までが描かれ、その後2人がどのような人生を送ったかは語られない。そのためファンたちは、ミュージカルが提示するこの結末を不十分とし、エルファバと、共にオズの国を去った彼女の恋人フィエロの恋愛関係を描き出したり、エルファバとグリンドの再会をアートの中で実現させたりすることで、個々が思い描く『ウィキッド』の結末を作り出している。

その他にも、本来友人同士であるはずのエルファバとグリンドを恋愛関係に描いたファン・アートも多く存在する。『ウィキッド』だけではなく、映画やドラマなど、様々な作品のファン・カルチャーでは、ファンたちが、友情関係にあるはずの同性のキャラクター同士を性的関係に描く「スラッシュ (Slash)」と呼ばれるフィクションを制作しているが²⁶、まさに『ウィキッド』のファン・カルチャーでもエルファバとグリンドの恋愛関係を描いた「スラッシュ」アートが数多く存在する。ミュージカルでは、エルファバがフィエロと結ばれる結果となるが、「スラッシュ」アートを描くファンたちはこれに抵抗し、エルファバとグリンドのカップルこそが理想のカップルであると訴える。この「スラッシュ」アートに対する他のファンたちの反応はもちろん様々であり、嫌悪感を示すファンもいれば、ミュージカルよりもスラッシュ・アートが描く世界を評価するものもある。

スラッシュ・アートの他に、近年よく見られるファン・アートには、『アナと雪の女王』の主人公であるエルサとエルファバを一緒に描いたものがある。異なる作品に登場する2人のキャラクターをファン・アートに描くのは、『ウィキッド』と『アナと雪の女王』が共に、女性同士の連帯感や絆をテーマとしており、社会に抑圧され続けた女性主人公が自由と権利のために立ち上がるという点で共通するからだと考えられるが、ファンたちはテキストの結末や設定を変えてしまうだけでなく、このように他の作品をも持ち込んで、自身の欲する『ウィキッド』

の世界を作り上げようとする。

『ウィキッド』はファンタジー・テキストであるため、他のジャンルのテキストと比べ非現実性を含み、ファンたちの解釈や想像力を駆り立てている。ファンタジー・テキストは、「不一致、矛盾、両義性を抱え込んでいて、それが信頼と物語における数多くの切れ目をもたらし、したがってファンたちは無数のやり方でその切れ目を満たす気になる²⁷⁾」ものだと考えられているが、まさに『ウィキッド』のファンたちは、自身の創造力を用いてミュージカルの中にある「切れ目」をあらゆる方法で満たしており、『ウィキッド』のファン・カルチャーはファンたちの欲望を実現させ、独自の喜びを生み出す場所となっている。

このように『ウィキッド』のファン・カルチャーの中で見られるファンたちの動きは、多様であるが故に複雑である。本稿では、コミュニティ内における女性たちの会話に焦点を絞ってきたが、今後はファンたちがテキストから作り出す様々な制作物にも分析を加え、また、『ウィキッド』が様々な国で上演されているミュージカルであるが故に起こる国境を超えたファン同士の繋がりにも注目することで、流動的で多様な広がりを見せる『ウィキッド』のファン・カルチャーにおけるコミュニティの形成やファンがテキストから生み出す意味の形成についてより深い考察を行うことが課題である。

参考文献

(英語文献)

- Boyd, Michelle. "Alto on a Broomstick: Voicing the Witch in the Musical Wicked." *American Music* 28 (2010) : 97-118.
- Buger, Alissa. *The Wizard of Oz as American Myth*. North Carolina: McFarland, 2011.
- Cote, David. *Wicked: The Grimmerie, a Behind the Scenes Look at the Hit Broadway Musical*. New York: Hyperion, 2005.
- Davis, Amy M. *Good Girl and Wicked Witches: Women in Disney's Feature Animation*. New Barnet: John Libbey Publishing, 2009.
- Duffet, Mark. *Understanding Fandom: An Introducing to the Study of Media Fan Culture*. New York: Bloomsbury, 2013.
- Giere, Carol De. *Defying Gravity: The Creative Career of Stephen Schwartz from Godspell to Wicked*. New York: Applause Theatre & Cinema Book, 2008.
- Green, Joshua, and Henry Jenkins. *Spreadable Media: Creating Value and Meaning in a Networked Culture*. New York: NYU Press, 2013.
- Hellekson, Karen, and Kristina Busse. *Fan Fiction and Fan Communities in the Age of the Internet*. New York: McFarland & Company, Inc, 2006.
- Hill, Matt. *Fan Culture*. New York: Routledge, 2010.
- Hobson, Dorothy. *"Crossroads": Drama of a Soap Opera*. New York: Methuen Publishing Ltd., 1982.
- Jenkins, Henry. Fan Bloggers, and Gamers: *Exploring Participatory Culture: media Education for the 21st Century*. Massachusetts: Macarthur, 2013.
- Jenkins, Henry. *Textual Poachers*. New York: Routledge, 1992.
- Laird, Paul R. *Wicked: A Musical Biography*. The Scarecrow Press, 2009.
- Whelehan, Imelda. *Feminism & Popular Culture: Investigating the Postfeminist Mystique*. New York: I. B. Tauris, 2013.
- Wolf, Stacy. *Changed for Good: A Feminist History of the Broadway*. New York: Oxford University Press, 2011.

(英語ウェブサイト)

- Innuendo & Outuendo.com, <http://innuendoandoutuendo.com>.
- Fly High, A Wicked Fan Site! <http://flyinghighwithwicked.blogspot.jp>.
- Gregory Maguire Discussion Board, <http://www.gregorymaguire.com>.
- Musicals.com, <http://www.musicals.com>.
- The Official Free app for Wicked.
- Unlimited: The First Official Wicked Fan Society, <http://unlimitedwicked.weebly.com>.
- Unlimited: The First Official Wicked Fan Society (Facebook). http://www.facebook.com/UnlimitedWicked?v=app_2347471856.
- Wicked Broadway (Fan Page), <http://www.facebook.com/WICKEDBroadway>.
- Wicked Fan Club, <http://www.fanpop.com/clubs/wicked>.
- Wicked the Musical, <https://www.facebook.com/Wickedthemusical>.
- Witches of Oz, <http://www.witchesofoz.com>.

(日本語文献)

- アリスン・ピープマイヤー (2011) 野中モモ (訳) 『ガール・ジン「フェミニズムする」少女たちの参加型メディア』(太田出版)。
- カレン・ロス、バージニア・ナイチンゲール (2007) 児島和人、高橋利枝、阿部潔 (訳) 『メ

- ディアオーディエンスとは何か』(新曜社)。
- ジョン・フィスク 1998 山本雄二(訳)『抵抗の快楽 ポピュラーカルチャーの記号論』(世界思想社)。
- スーザン・ファルデイ (1991) 伊藤由紀子、加藤真樹子(訳)『バックラッシュ 逆襲される女たち』(新潮社)。
- 池田太臣 (2013) 「共同体、個人そしてプロデュセージ—英語圏におけるファン研究の動向について—」『甲南女子大学研究紀要』49号:107-119。
- 須川亜紀子 (2013) 『少女と魔法—ガールズヒーローはいかに受容されたのか』(エヌティティ出版)。
- 田中東子 (2012) 『メディア文化とジェンダーの政治学 第三波フェミニズムの視点から』(世界思想社)。
- 渡辺和子 (1997) (編)『アメリカ研究とジェンダー』(世界思想社)。

脚注

- 1 Henry Jenkins, *Textual Poachers* (New York: Routledge, 1992), 17.
- 2 私が参与観察を行ったものは、以下のウェブサイトである。
 Innuendo & Outuendo.com, <http://innuendoandoutuendo.com>
 Fly High, A Wicked Fan Site! <http://flyinghighwithwicked.blogspot.jp>
 Gregory Maguire Discussion Board, <http://www.gregorymaguire.com>
 Musicals.com, <http://www.musicals.com>
 The Official FREE app for Wicked
 Unlimited: The First Official Wicked Fan Society, <http://unlimitedwicked.weebly.com>
 Unlimited: The First Official Wicked Fan Society (Facebook), https://www.facebook.com/UnlimitedWicked?v=app_2347471856
 Wicked Broadway (Fan Page,) <https://www.facebook.com/WICKEDBroadway>
 Wicked Fan Club, <http://www.fanpop.com/clubs/wicked>
 Wicked the Musical, <https://www.facebook.com/Wickedthemusical>
 Witches of Oz, <http://www.witchesofoz.com> (2014年11月から閲覧ができなくなっている。)
- 3 Don Aucoin, "For girls, 'Wicked' casts a spell," *The Boston Globe*, August 10, 2013. <http://www.bostonglobe.com/arts/theater-art/2013/08/10/for-girls-wicked-casts-spell/JMqgnhBn2jaLpldqkaaKCK/story.html> (accessed May 12, 2014).
- 4 Campbell Robertson, "Tweens Love Broadway, but Can't Save It All," *The New York Times*, October 2, 2007. <http://www.nytimes.com/2007/10/02/theater/02twee.html?pagewanted=all&r=0> (accessed May 12, 2014).
- 5 David Cote, *Wicked: The Grimmerie, a Behind the Scenes Look at the Hit Broadway Musical* (New York: Hyperion, 2005), 122-123
- 6 須川亜紀子 『少女と魔法—ガールズヒーローはいかに受容されたのか』 エヌティティ出版, 2013年, 49-50頁。
- 7 『ウィキッド』が初演を迎えた2003年に作られたファン・コミュニティ「Unlimited: The First Official Wicked Fan Society」は、ファン・サイトやFacebook、Twitterを同時に運営している。
- 8 "Broadway Ticket Help!" Innuendo & Outuendo.com, <http://www.innuendoandoutuendo.com/forum/showthread.php?tid=4484> (accessed September 18, 2014).
- 9 ブロードウェイのミュージカル劇場で配られる作品の情報が載った小冊子であり、ミュージカルの観劇者に無料で配られるものである。
- 10 "Sending Mail to Wicked," Innuendo & Outuendo.com, <http://www.innuendoandoutuendo.com/forum/showthread.php?tid=4510> (accessed June 24, 2014).
- 11 Cptn. Wazoo [pseudo.], comment on "How exactly are they "changed for the better?," Musicals. Net, comment posted November 10, 2013, <http://musicals.net/forums/viewtopic.php?f=96&t=88888&sid=b75f0f3240182c2928f2d02de630e83b> (accessed July 1, 2014).
- 12 Jman383 [pseudo.], comment on "How exactly are they "changed for the better?," Musicals. Net, comment posted January 9, 2014, <http://musicals.net/forums/viewtopic.php?f=96&t=88888&sid=b75f0f3240182c2928f2d02de630e83b> (accessed July 1, 2014).
- 13 Vanessa20 [pseudo.], comment on "How exactly are they "changed for the better?," Musicals. Net, comment posted January 9, 2013, <http://musicals.net/forums/viewtopic.php?f=96&t=88888&sid=b75f0f3240182c2928f2d02de630e83b> (accessed July 1, 2014).
- 14 Cote, op. cit., P.184

- 15 Ibid.,184.
- 16 ElphabaFabalaElphieFae [pseudo.], comment on “Which Wicked Character Best Matches Your Personality?” Gregory Maguire Discussion Board, comment post August 7, 2006, <http://www.gregorymaguire.com/discussion/ubb/Forum5/HTML/000990.html> (accessed August 20, 2014).
- 17 Stephanie [pseudo.], comment on “Elphaba Troop” The Official App for Wicked, comment posted April 10, 2014, (accessed May 7, 2014).
- 18 劇団四季が上演する日本語版『ウィキッド』において、“Defying Gravity”は『自由を求めて』という題名であるが、この論文では原題により近く「重力に逆らって」と訳すこととする。
- 19 Dianna [pseudo.], comment on “Reviews,” WICKED The Musical, comment posted October 28, 2014, <https://www.facebook.com/Wickedthemusical?sk=reviews> (accessed October 31, 2014).
- 20 LPhiBa [pseudo.], comment on “What is YOUR Defying Gravity?” Gregory Maguire Discussion Board, comment posted October 30, 2006, <http://www.gregorymaguire.com/discussion/ubb/Forum5/HTML/001049.html> (accessed August 20, 2014).
- 21 Dasha [pseudo.], comment on “What is YOUR Defying Gravity?” Gregory Maguire Discussion Board, comment posted January 6, 2007, <http://www.gregorymaguire.com/discussion/ubb/Forum5/HTML/001049.html> (accessed August 20, 2014).
- 22 FiyeroFae [pseudo.], comment on “What is YOUR Defying Gravity?” Gregory Maguire Discussion Board, comment posted November 2, 2006, <http://www.gregorymaguire.com/discussion/ubb/Forum5/HTML/001049.html> (accessed August 20, 2014).
- 23 Threefold_W [pseudo.], comment on “What is YOUR Defying Gravity?” Gregory Maguire Discussion Board, comment posted November 2, 2006, <http://www.gregorymaguire.com/discussion/ubb/Forum5/HTML/001049.html> (accessed August 20, 2014).
- 24 Mslizwatson [pseudo.], comment on “Haters to the Left, Please,” The Toast, comment posted January, 2014, <http://the-toast.net/2014/01/15wicked-haters-to-the-left/> (accessed June 2, 2014).
- 25 イメルダ・ウェルハンは、第二波フェミニズムの功績をかき消すように、伝統的な「女らしさ」のイメージが、21世紀のポピュラーカルチャーで再生産され、本来であればこの伝統的な「女らしさ」のイメージこそが時代遅れなものであるはずなのに、ポピュラーカルチャーによって「女らしさ」が「再制定」、「再神秘化」されたことで、フェミニズムが時代錯誤なものへ変化したと論じている。(Imelda Whelehan, *Feminism & Popular Culture: Investigating the Postfeminist Mystique* (New York: I.B. Tauris, 2013) 1-12.)
- 26 Jenkins, op. cit., P.185-222
- 27 カレン・ロス、バージニア・ナイチンゲール 児島和人、高橋利枝、阿部潔訳『メディアオーディエンスとは何か』新曜社, 2007年, 168頁。

Abstract

Searching Yourself:

The Broadway Musical *Wicked* and Female Fans

INOKUCHI Yukiko

In this project, I explore how young female fans engage in the “participatory culture” of the Broadway musical, *Wicked*, through the Internet and how they collaborate with each other to construct alternative language for discovering and re-discovering their gendered selves. The concept of participatory culture that I use in this project is that of Henry Jenkins. According to Jenkins, “Participatory Culture is the idea that members believe their contributions matter, and feel some degree of social connection with one another. Participatory Culture shifts the focus of literacy from one of individual expression to community involvement .¹”

It has been pointed out that the language of feminism is not attractive for many young women, and they cannot identify themselves as feminist, even if they believe in sexual equality and women’s rights. So, my argument is that these Internet fan communities are acting as a forum with alternative language to discuss gender issues and help women discover and re-discover who they really are.

To explore my research question, I analyzed *Wicked* as cultural text that kindles fans’ enthusiasm. I also examine how fans interpret this musical by relating it with their own experience. I participate in fan communities on websites and blogs, and observe their conversations, exchanges of information, and their creative art works. I observe Internet fan pages and fan communities as the intersection between fans and *Wicked*, and explore how fans connect their experiences with two female characters, Elphaba and Glinda. Young female fans identify themselves in these two characters and relate that with their own self-awareness. Fan communities of *Wicked* are filled with alternative language and mutual empowerment, and I see this as the most important aspect of the culture of *Wicked* created by the fans.

Reference

1. Henry Jenkins, *Confronting the Challenges of Participatory Culture: Media Education for the 21st century*. (Massachusetts: Macarthur, 2009.) 5-6.